山陽新聞　第3種郵便物認可

被災者の力になりたい

東日本大震災

陸路、空路から東北へ―。甚大な被害が出ている東日本大震災発生から一夜明けた12日、県内では緊急消防援助隊やヘリコプターの消防防災航空隊、医療関係者らが現地へ出発した。各自治体などからの救援物資も次々と送られ、スーパーや市民団体は募金活動を実施。「被災者の力になりたい」という支援の輪は、急速に広がっている。

消防援助隊や医師

次々出発　トラックで毛布、米も

県、自治体など

緊急消防援助隊は、岡山市の特別高度救助隊員を含む倉敷、津山など県内14消防本部の132人で編成。消防庁の要請を受けた県が午前6時すぎに招集し、がれきを取り除くクレーンを備えた震災工作車など約35台で被災地を目指した。

岡山空港からは消防防災ヘリコプター「きび」が出発。県消防防災航空隊の若林修二隊長(45)は「人命救助がわれわれの使命」と力を込め、隊員6人と共に午後、宮城県石巻市で救助や消火活動に着手した。陸上自衛隊三軒屋駐屯地(岡山市)からも約70人が車両約40台で宮城県へ向かった。岡山、倉敷、津山など6市は日本水道協会県支部の要請で、給水車各1台を派遣した。

一方、石井知事は同日朝の関係部局長会議で「県としても物的・人的支援活動を可能な限り行いたい」と述べた。要請があれば、被災者の心のケア対策として、専門部隊や登録ボランティアの派遣も検討しているという。

医療支援も広がり、県医師会は、原子力災害に対応できる井戸俊夫会長と松山正春理事の医師2人を福島県に派遣。笠井英夫専務理事は「未曽有の大災害。いかなる事態にも対応できる医師を送った」と話した。災害派遣医療チームDMAT(ディーマット)も兼ねる日赤県支部の救護班は、原発周辺住民の避難所になっている郡山高校に救護所を開設した。

ほかのDMATの医師や看護師ら計22人も伊丹空港(大阪府)から、津波被害が深刻な岩手県に自衛隊機で入り、病院などで活動。国際医療ボランティア・AMDA(岡山市)も医師や看護師らの医療チームを送った。

救援物資を送る動きも本格化した。岡山市は、災害時相互応援協定を結んでいる仙台市に毛布1千枚、非常用米1500食、クラッカー2500食などをトラックで輸送。津山市も備蓄している毛布や食料などを提供する準備に入った。

公設国際貢献大学校は、臨時休店と

東日本大震災の被災地に向かう緊急消防援助隊員＝12日午前9時20分、岡山市中区桑野

消防防災ヘリ「きび」に乗り込む県消防防災航空隊員ら＝12日午前6時45分、岡山空港

被災地への支援などについて協議した県の関係部局長会議＝県庁

沿岸部の津波注意報を解除

交通機関は正常化

気象庁は12日午後1時50分、県沿岸部に出していた津波注意報を解除した。

注意報は11日午後3時半に発表され、同8時1分に最大10㌢の津波を観測した。

11日夕から運休や欠航、遅れが出ていた陸海空の交通は12日中に正常化。JR東海道・山陽・九州新幹線は始発から通常ダイヤで運行した。宇高、小豆島航路など海の便も朝から運航を再開。空の便は岡山空港で東京発の1便が欠航したが、正常に戻った。